

『Club Diletto』

稲垣は暗い階段を慎重に下りた。厚みのある絨毯が硬い靴裏を優しく包み、まるで違う世界に誘おうとしているかのように感じられる。

下りきると、正面に黒く重厚なドアがあった。天井と右側の壁にはカメラの小さな赤いランプが光っている。

稲垣が正面に立つと、内開きのドアはすぐに開いた。

「いらっしやいませ。稲垣様でいらっしやいませね」

一流のホテルマンのような完璧な笑顔。顔の確認から名前が出るまでの早さに、稲垣は内心舌を巻いた。

「初めてなんだが」

そのことは予約の段階で伝えてあった。念を押すように口にすると、ボーイは笑みを深めて頷いた。

「当店をお選び頂きありがとうございます。ご案内いたしますのでどうぞお入りくださいませ」

稲垣が店内に足を踏み入れると、厚さ十センチものドアが音もなく閉まった。ボーイに続いて暗い廊下を進み、正面のドアをくぐる。

通されたのは広いフロアだった。部屋の中には円形のステージがあり、それを囲むように十二のテーブルと、ステージに相對する向きのみ置かれたソファが並んでいる。

ステージは無人だったが、ほとんどの卓が埋まっていた。テーブルに座る華奢な男の子とソファに座る男性客。男の子はみんな足を広げ、客に陰部を見せつけたり顔を埋められたりして甘い声を上げている。

「こちらです」

テーブルとステージの間の通路を進み、三つ目の席。ソファに腰を下ろすと、程よい反発を持ったクッションが稲垣の腰を包んだ。

「ご指名はいいがいたしますか」

ボーイが稲垣の横に膝をついた。昔ながらの喫茶店にあるような厚みのあるメニュー表を広げて見せる。

「一番人気のない子がいいな」

ボーイは一瞬表情を固めたように見えたが、すぐに笑みを作りページを捲った。最後から二ページ目、一番目につきにくそうなところを開く。

「雅(みやび)です」

ちんぱブ——性器を弄らせる店なのだから、もつと妖艶な男の子がいるものだ

思っていた。しかし雅という青年は色気よりも幼さをまとっているように見えた。くりっとした大きな目。丸みのある柔らかそうな頬。鼻筋は通っているようだが唇がふっくらしているせいで少しだけそこが浮いて見える。髪は柔らかくふわっとしたミディアム。女性だったらショートカットというのかもしれないが、今月四五になった稲垣には非常に長く感じられた。しかし、雅にはよく似合っていた。

「この子はまだ子どもじゃないのかな」

さすがに高校生がいるとは思わなかったが、雅はあまりにも幼かった。

「高校を卒業した十九歳です」

プロフィール欄を見る。雅、十九歳。最終学歴高卒。好きなことは「抱っこ」で、苦手なことは「フェラチオ」——どうやら奉仕するより快感を与えられる方が好きな甘えん坊らしい。

「若いね。こんなおじさんで嫌がられないといいんだが」

稲垣はもう雅に決めていた。メニュー表を閉じてボーイに返す。

「こちらをご覧ください」

受け取ったばかりのメニュー表をボーイが開いた。

「——よかった」

見せられたのはプロフィールの最後。好きなタイプは優しい年上。

「お飲み物は何にいたしましょう」

「彼と会ってから一緒に決めても？」

「もちろんです。では少々お待ちください」

ボーイが立ち去ると、稲垣は辺りに視線を巡らせた。ソファの数もテーブルに合わせて十二のみ。稲垣が座ったことで空きは一席だけになった。どうやら人気のある店らしい。

ふと、隣の卓の男性客がボーイに金を渡しているのが目に入った。受け取ったボーイがその席にカーテンを引いて視界を遮る。稲垣が視線を上に向けると、自席にも病院の大部屋についているカーテンレールのようなものがソファとテーブルを広く囲む形で設置されていた。

「失礼いたします」

男の声に、視線を下ろす。先程のボーイが立っていた。その後ろには身長百六十センチ程度の、小柄で写真よりもかわいらしい顔つきをした雅がいた。

白いシャツに、赤と濃紺のチェックのミニスカート。細い太ももにはガーターベルトが見えている。

「雅です」

ボーイの紹介で雅がちよこんと頭を下げた。しかし緊張しているのか視線がキョロキョロと動いている。小動物のような仕草が初々しい。

「よろしくね」

「よろしくお願いたします」

「どうぞ座って」

「し、失礼します」

雅がおずおずと稲垣の前のテーブルに腰掛けた。膝をピタリと閉じ、その上に握った両手をしゃんと置く。

「緊張してる？」

「は、はい……」

「怖いことはしないよ」

初心なフリをしているのか、それとも本当に初心なのか——。

「は、はい……」

雅が短いスカートをきゅつと握った。その手が震えているのが暗い店内でもよくわかる。

(……本当に緊張してるな)

雅は、自分からは一言も話そうとしなかった。無言のまま俯き加減で目をキュツと閉じている。

稲垣がこの店——Club Diletto——に来たのは初めてだが、こういう店は初めてではない。しかしどこに行ってもみんな接客上手で無言になることなど一度もなかった。

「雅くん」

「は、はいっ！」

「何を飲む？」

「えっ？」

「一緒に決めようと思ってまだ注文していないんだ。ジュースがいいかな」

きっと他の子が相手だったら、どうしてこちらが気を遣わないといけないんだと思っただことだろう。しかし雅は、稲垣が自分でも驚くほどに守ってやりたいと思わせる何かを持っていた。

(この子にして正解だったな)

つい先日まで通っていた店は、通り過ぎたせいや関係がなあなあになってしまった。指名しているのが人気がある子だったせいもあり、売り上げ競争のために断りもなくシャンパンやフルーツの盛り合わせを頼まれるようになってうんざりしたのだ。金を払うのはかまわなかったが、節度ある接客をしてほしかった。

しかしこの子は——直観だが、付き合いが長くなっても身勝手な行動を取るようにはならないような気がした。きつときちんと一線を引き、立場をわきまえた接客をしてくれる。

「お酒は……まだ二十歳前だったね」

「あ、あの……いいんですか？ 僕がいただいてしまっても」

「え……」

謙虚そうだとは思っていたが、まさか飲み物一杯で確認を取られるとは。しかも

訊き方が慎ましさを通り越して切なさを感じさせる。

(人気がないのは自信がないせいかな?)

顔立ちだけでなく声や話し方もかわいらしい。控えめだから売り上げは上がらないかもしれないが、普通にしていればそれなりに指名も取れそうなものなのに。

「——どうして? 一緒に飲もう」

「はい……ありがとうございます」

「もしかしてあまり席に着いたことはない?」

一番人気のない子をとら言ったが、それなりの経験はあると思っていた。平日の夜でこれだけ卓が埋まっているのだ。ヘルプ制度のない店でも、フリーで来た客の相手くらいはしているだろう。

「すみません……」

どうやら想像以上に経験が浅いらしい。そういう純粹なところもかわいいなと思ってしまう。

「いや……まだ入ったばかりかな」

「一年くらい、です……」

「席に着いたのはどれくらい?」

「席には着けていただくんですが……そのあとすぐチェンジになってしまつて」

がつついた客ならそうなるだろうなと稲垣は内心で領いた。手っ取り早く行為に及びたい相手には、この性格は面倒くさいと思われる。

「そうか。でも私はそんなことはしないから」

震えたままの手に触れながら言うと、雅が怯えた目で稲垣を見た。

「あの……ごめんなさい、僕、おちんちんがダメなんです」

「ダメ?」

ここはちんパブで、キヤストのペニスを弄ることができるといのが売りのはずだが。

「その……あまり気持ちよくなれなくて」

「それは強引にされたからとかじゃなくて?」

「自分でするのも……ダメなんです」

それならどうしてこんな店に——稲垣は開き掛けた口をつぐんだ。確かこの上階は寮になっていて、身請けを待っている男の子たちが住んでいると聞いたことがある。その子たちはこのキヤストに混じってお披露目のために出勤しているという。一年もいてクビにならないというのは、本当はそちらの子だからなのだろう。

「……痛みはある?」

「はい……あ、でも、病気の検査とか健康診断では異常はないみたいで」

なんとなく話し方も幼いので、知識が年相応に備わっていないのかもしれない。客に触られて痛かったのは雑に扱われただけで、自分でしても痛みがあるのは知識がない故に正しい弄り方をしていないだけなのではないかと稲垣は考えた。

「じゃあ怖くなっちゃうね」

「え……？」

「気持ちよくなれないのに無理矢理触られたら怖いだろう」

「あ……」

「今日はお話をしよう。飲み物は何にしようか」

「でもおちんちん……」

スカート握る雅の手にさらに力がこもった。

「いいんだよ」

確かに稲垣がここにやってきたのはかわいい男子の子のペニスを弄り、ストレスと性欲を発散するためだった。しかし雅は想像以上に好んで優しくしてやりたくなたし、怯えさせないようにじっくりと時間をかけて性感を教え、いつか稲垣のやり方で気持ちよくなる姿を見たいと思いついていた。

だがそのためには雅が他の客に愛撫をされないよう、ここに通い詰めなければならぬ——稲垣は頭の中で素早く仕事のスケジュールを組み直した。

「けど……」

「無理して弄つても楽しくないだろう。私はおじさんだからね。ただおちんちんを弄りたいわけじゃないんだ」

「え……や、あの、おじさんではないと思いますけど……」

「ありがとう。私はね、おちんちんを弄られて気持ちよくなっているところを見たんだよ」

「じゃあ他の人の方が……」

どうやら雅はよほど自分に自信がないらしい。もしかしたら店にも成績の悪さを責められているのかもしれない。

「雅くんがいいんだ。雅くんが気持ちよくなるところが見たい」

「で、でも僕、気持ちよくなったことってないんです」

思わぬ言葉に、稲垣は開きかけていたメニュー表を床に落とした。慌てて拾いながら、「一度もっ」と問いかける。

「はい」

「じゃあオナニーはどうしてるの？」

「出さないとつらいので月に一回くらいはするんですけど……自分でしてもつらいのでタオルを噛んで叫ばないようにして」

なんてことだ。いくら抜いても抜き足りない、やりたい盛りの青年がそんなつらい射精をしているなんて。

稲垣は同情を抱くとともに、言い様のない高ぶりを自覚した。極端なほど性に疎い青年に、本当の快楽を教えてやりたい。そして稲垣がいなければ射精できないと思わせてしまいたい。

「そう……それはつらいね。いつか私が気持ちいい射精を教えてあげたいな」

「ありがとうございます」

雅が無理矢理笑顔を作った。そんなこと、どうせできないと諦めているのが透けて見える。いったい何が彼をそうさせたのか。

「……まずは飲み物を飲もう。おすすめはある？」

気持ちを切り替えてスパッと聞くと、雅はわずかに表情を緩めた。しかしすぐ、困ったような戸惑いの表情で稲垣を見た。

「えっと……」

「稲垣だよ」

「稲垣さん。お酒は飲まれますか」

「普段は飲むけどね。初対面で酒臭いおっさんの相手は嫌だろう？ 私はウーロン茶をもらうよ。雅くんは好きなものを選びなさい」

「じゃあいちごミルク、いいですか」

「もちろん」

注文は稲垣がした。通常こういった店ではキャストがするものだが、たとえボーイ相手であっても雅から話しかけるのを見るのは嫌だった。

かしこまりましたと言って去っていくボーイの背中を見送り、視線を雅のスカートに移す。

「足が細いね」

ピタリと閉じられた足には張りがある。

「昔から太らなくて……」

脂肪だけでなく、筋肉もないように見えた。体質なのか、じゅうぶんに食べていないのか。

「雅くんはここに通ってるの？」

「いえ……上にいます」雅が困ったように笑った。

（やはりそうか……）

身請け待ちということは借金の肩代わりを店に頼んでいる立場というわけで……無駄遣いをするようなタイプには見えないし、年齢から考えても、おそらくその借金を作ったのは雅自身ではないはずだ。やるせない。

しかし少しでも早く身請けされなければ生活費の分も身請け額に加算され、さらに相手が見つかりにくくなる。そういう子が行き着く先はここよりもっとハードな内容の店や、普通には満足できないような悪質かつ激しい趣味を持つ個人になる。

「上にも一年？」

「いえ、もうすぐ十年になります」

「十年？ ってことはかなり小さいときだね」

では雅をここに売ったのは両親か。

「はい」

「そう……」

稲垣の反応で、上がどういふところなのか知られていると雅は覚ったようだった。「あ、で、でも僕、友達もいるし……今日はこうして稲垣さんにお話ししてもらえて嬉しいです」

ここは競争の世界だ。本当に仲良くしてもらえているのかは怪しいし、十年もいるとなれば身請け額も店からのプレッシャーも相当なものになるだろう。年相応の楽しい生活をしているとは思えなかった。

「じゃあ今日はたくさんおしゃべりしよう」

「はい！」

雅がようやく笑顔を見せたとき、ボーイがドリンクを運んできた。グラスを合わせるそぶりをしてから傾ける。

「稲垣さんはこういうお店って慣れてるんですか」

「慣れてる……うくん、そうだね。仕事で疲れたときに来るくらいかな」

「そうなんですか。でもうちは初めてっってお聞きしました」

「うん。気分転換にね。でももうここしか来ないよ」

「え？」

「雅くんに気持ちいいこと教えてあげるって言っただろう」

「あ……」

雅がギュッと目を閉じた。色を含んだその表情にMの素質を感じる。

「雅くんはさ、おちんちんで気持ちよくなるようになったらどんなふうにしたい？」

「え……想像したこともないです」

「されてみたいことは？」

「抱っこで……手でこすってほしい……です……」

想像だけで顔を赤くする様子は本物の清らかさだった。押し倒して泣かせたくなる気持ちをぐつとこらえる。

「フェラチオは？」

「苦手なんです。苦手ってプロフィールにも書きちゃってるから余計に人気がないのかもしれないんですけど」

「あのフェラチオってする方じゃなくてされる方のことだったの？」

「はい」

逆だと思っていた。しかしオナニーでもつらく感じるのであればフェラチオなんてされたらたまったものではないだろう。しかし、ここはそれをさせるための店だ。

「そうか。じゃあフェラチオで気持ちよくなって、私の口に射精するのを目標にしようか」

「っ……」

雅の肩が小さくなった。言葉だけでそんなに怯えてしまうとは。

「ああ、ごめんね、まだ早かったね。おいで、抱っこしよう」

腕を伸ばすと、雅は思いの外ずりりとテーブルから下りた。見えそうで見えないスカートラインについて視線が向かってしまう。願望を振り切るように顔を見上げる。

「——おいで」

「あの、えっと……」

好きと言いながら、どうやら抱きしめられることにも慣れていないらしい。戸惑いながら正面に立った雅の腰に腕を回し、対面で膝の上に座らせる。

「あつ……」

「加齢臭がするだろうから、口で呼吸して」

「そんな……あれ？」

「ん？」

スンスンと耳元を嗅がれた。さすがに少し恥ずかしくなる。

「雅くん？」

「いい匂い……」

「え……」

「ん……好き……いい匂い……」

雅が首元に顔を埋める。付近の空気が吸われているのを肌で感じる。

「ん……はあつ……」

雅は上半身をびたりとくっつけてぎゅうぎゅうとすがりつくように抱きつき、稲垣の襟の隙間にまで鼻をこすり付けて匂いを嗅いだ。

(かわいいな……)

匂いに夢中になる雅の背中を撫でていると、ふとスカートの短さを思い出した。お尻が上がっているのでフロアの方からは中が見えてしまっているだろう。雅の邪魔をしないように注意を払いながら、ジャケットの内ポケットに入れた財布を取り出す。

「君、」

ボーイに呼び掛けると、雅の体がビクンと跳ねた。違うよと伝えるために背中を撫でて頭を抱き寄せてから、ボーイに引っ張り出した札を渡す。

「カーテンを閉めてくれ」

「かしこまりました。こちらをお使いください」

テーブルに置かれた小さなかご。中にはローションとコンドームが入っていた。

「い、稲垣さん……」

カーテンが閉まりきると雅は顔を離れた。目はトロンとしているが、その表情には怯えがある。

「しないよ。ただカーテンがないと雅くんのかわいいところが見えてしまう気がしてね」

「甘えてるところ……ですか」

どうやらスカートの短さは頭から抜け落ちてしまっているらしい。それだけ匂いに夢中になってくれたのかと思うと喜びに胸が高鳴る。

「そうだね。雅くんが甘えてくれているところは誰にも見せたくない」

「恥ずかしい……」

「かわいいよ。おいで」

稲垣がもう一度頭を引き寄せると雅はさらに顔をとりけてみせ、首筋に鼻をこすり付けて匂いを嗅いだ。

「はあっ……」

「そんなに好き？」

彼なりの営業なのか、それとも本当に相性がよかったのか。

「んっ、好きっ、いい匂い……ん、はあっ」

鼻で空気を取り入れすぎて、吐き出すときの吐息が熱い。その高温で稲垣のペニスが硬くなっていく。

(まずいな……)

勃起はすぐに感じ取られるだろう。怯えさせないといいが――。

「っあ、稲垣さん……」

「ん？」

「僕、むずむずっ……」

体を離れた雅の頬は桃色に上気し、目もとろりととろけていた。半開きの口からは熱い吐息が漏れている。

「はあん……」

「暑い？」

「はい……」

雅のカッターシャツのボタンを外す。抵抗されるかと思っただが、雅はうつとりとした顔で稲垣を見つめるだけだった。第四ボタンまで外すとあばらの浮いた薄い胸板が現れた。その頼りなさに胸が切なくなりながらも、まだ隠れたままの乳首が気になる。

「おっぱいを見てもいいのかな」

「は、はい」

雅が恥ずかしそうに顔を背け、目を閉じて眉根を寄せた。嫌がっているわけではないと判断し、胸元を左右に開く。

「ああ……とてもかわいいね」

あまりの絶景に感嘆の息が漏れた。

雅の乳首はまるで摩擦を受けたことなんて一度もありませんというような薄いピンク色をしていた。着色したようなその淡い色に体がさらに高ぶるのを感じる。敏感そうな小さなそれをこねまわし、真っ赤に染めてしまいたい。

「やあ……恥ずかしい……」

「すごくきれいだよ」

「や……」

「ここを触ったり触られたりは？」

「えっ、ないです！」

「誰も触らないの？」

「みんなおちんちん……」

「そうか、そうだね。みんな雅くんのおちんちんを見たがったんだね」

「稲垣さんも見たいですか……？」

「見てもいいのかな」

「見てください」

雅がゆっくりとスカートを捲った。現れたのは薄いピンクのレースでできたフロントポーチのGストリングで、ポーチの真ん中には縦に割れ目が入っている。しかし細い赤紐が蝶々結びで中身を隠すようにそこを閉じており、肝心なところはよく見えない。その下の陰囊を包む部分には、紐と同じ色のリボンが縫い付けられていた。

「とてもセクシーだね」

「恥ずかしいです……」

雅はもじもじと腰を揺らした。

「下着をちゃんをつけてるのに見えちゃってるよ」

ペニスの先端部分はレースが厚くなっており見ることは叶わない。しかし竿や陰囊の膨らみは一見ただけですぐにわかった。

「あん……やだあ……」

「この紐は？」

「あ……ほどこいでください……」

「ほどこいたら？」

「おちんちんが……」

「いいの？」

仕事なのだからダメと言えないことはわかっていた。しかしそれでも雅からの許可が欲しかった。

「はい……」

「ありがとう」

まるで初めてできた恋人に初めての口付けをしたときのような緊張感。年甲斐もなく震えそうな手を伸ばし、細すぎて頼りない紐をゆっくりと引っ張る。

「あっ……」

紐はスルッと簡単にほどこけた。中身の体積により下着の割れ目が膨らんで、そこからポロンと小さなペニスが顔を出す。

「出してあげなきゃいけないのかなと思ったけど」

「みんなは手でしないと出ないんですが……」

「雅くんはおちんちんが小さいから勝手に出ちゃうんだね」

「う〜……はい……」

ゆつくりと勃起を始めたペニスは、稲垣が見つめているだけでどんどん角度を変えていった。しかし、上を向いても大きさはほとんど変わらない。

「あまり大きくならないのかな」

「これでも膨らんでるんですけど……あんまり変わらなくて」

「そうか。じゃあずっと小さいままなんだね」

「あつ……」

小さな膨らみがピクンと揺れた。こんなにかわいいものを見せつけられては誰でもがつつきたくなるだろうと思いつながら、稲垣はどうか冷静になると細く息を吐いた。

「近くから見たいな」

「はい」

雅がするりと足から下りた。スカート裾をふわりと膨らませながらテーブルに戻り、足を開く。

「僕のおちんちん見てください」

「ありがとう」

真性包莖の小さなペニスは一センチほどの皮の窄まりを作っていた。オナニーでも痛いと言っていたので触れてしまわないように気をつけながら、至近距離からそれを見つめる。

「勃起するだけでも痛い？」

「あんまり大きさが変わらないので大丈夫です」

「そうか、そうだったね」

勃起をしても雅のペニスは人差し指の第二関節ほどの長さしかなかった。太さは親指程度。オナニーをするにも握るというよりつまむという形になるんだろうと下世話なことを考える。

スンスンと先端を嗅ぐと香ばしい匂いがした。恥垢の匂いだとわかっている不快感はない。

「あつ……」

さつき雅も同じようなことをしたというのに、雅はいやいやと首を振った。

「恥ずかしい？」

「恥ずかしいっ……!!」

「でもいい匂いだよ」

「ヤダっ、汚いから……」

「汚くないよ」

「でも洗えないから……」

「中は洗えなくても周りは洗ってるだろう？」

「そうですけど……」

「それなら汚くないよ」

中はきつと恥垢にまみれているだろう。しかし汚れていればいるほど洗い甲斐がある。いつか——早くこの小さな皮の窄まりから綿棒を入れてクリクリと回し、恥ずかしい汚れを取ってやりたい。

もう、稲垣は雅の身請けを決めていた。雅を独り占めしたい。そして気持ちいいことをたくさん教えてやりたい。でもまずはここで快感を教えてやりたい。どうせすぐに身請けが許可されることはないだろうし、その間にこの店で稲垣からの指名を取って売り上げ実績を作り、少しでも自分に自信を持てる時間を作ってやりたい。そうしてから胸を張って堂々と「身請けされていきます」と挨拶ができるようにしてやりたい。

「でもっ……」

「おちんちんが気持ちよくなることを覚えたら中を洗ってあげるよ」

「中……？」

「そう。ここに綿棒を入れて優しくくるくるしてこすってあげる」

「そんなんっ」

「今は怖いかもしれないけど、ちゃんとおちんちんで気持ちよくなれるようになってからだから大丈夫」

「でも僕、気持ちよくなれるかどうか……」

「なれるよ、大丈夫」

「……はい」

稲垣はむしゃぶりつきたい衝動を抑えるためにウーロン茶を飲んだ。氷がとけ、すっきり味が薄くなっている。

~~~~~

（稲垣さんいい人だったな……）

稲垣は閉店の音楽が鳴るまで雅の頭を抱き、胸の匂いを嗅がせてくれていた。

連日の睡眠不足と初めての店での射精で疲れた体は、休息を求めてついうとうとしてしまった。けれど、寝てしまわないように必死に瞼を持ち上げていると、稲垣の体が揺れ始めた。

「眠ってかまわないよ」

そう言う稲垣の声も優しく、絶対に眠ってはいけなさと強く思った。

「大丈夫です」

「声もとるところだ」

「大丈夫です」

同じ言葉を繰り返していたことは、言ったあとで気がついた。頭が回っていない

とバレバレだった。同じように思ったのか、稲垣もくつくつと笑った。

「眠っている間に勝手におちんちん舐めたりしないから大丈夫だよ」

「あ……」

おちんちんを舐める——普通の人ならドキドキしてしまうようなセリフ。けれど雅はいつも恐怖心しか抱けなかった。でも稲垣はそれをしないと云ったのだ。稲垣の言葉は信じられる。

「毎日少しずつ弄って、おちんちん、刺激に慣らしていこうね」

「毎日……ですか」

「毎日来るよ。でも無理矢理おちんちんいじめたりはしないから」

「じゃあ——」

「さっきみたいにおっぱいを弄ったり、皮の先つぽをこちよこちよしたり……あと  
は雅くんのタマタマを揉んでみたいけど」

それならされたい、と思った。稲垣の指は優しかったし、話し方や気遣いだって  
今まで経験したことがないほど温かった。

——早く明日にならないかな……しんとした広いフロアにモップをかけ、客かキ  
ヤストかわからない誰かの精液を拭う。

八番テーブルの付近は特にたくさん濡れていた。今日ここに座っていたのはナン  
バーワンのキヤスト。外見はまるで女の子のようにかわいくて甘え上手。なのにペ  
ニスはとても立派で……雅なら問題なく穿けてしまうスカートでも、彼が穿くとペ  
ニスの先端が飛び出して見えてしまうのだ。勃起をすればスカートを持ち上げてい  
やらしい下着をまとった陰囊まで丸見えになって、彼はそれを手で隠しながら席に  
向かい、「会えるのが嬉しくて起っちゃった」とかわいらしく言ってお客さんを喜  
ばせる。

（あ、こっちにもついている……）

精液はテーブルの端まで飛んでいた。いったいどんな姿勢で射精したのだろう。  
テーブルののって、全身をさらしながらイっただのだろうか。自分で扱いて？ それ  
ともお客さんに扱かれて？

床を見ると、テーブルの脚にまで精液がついていた。細い筋でそれが垂れ、床を  
濡らしている。

（たぐさんイっただ……）

ペニスを扱かれて気持ちよくなるというのは、いったいどんな感覚なのだろう。  
今日の射精はすぐ気持ちよかったけれど、皮の窄まりへの刺激しか経験していな  
い。稲垣の手でペニスを包まれたら——しかし、そう考えるとやっぱり怖い。

「雅」

「っ、は、はいっ！」

誰もいないと思っていたフロア。屈んでいた体を起こして振り返ると、ステージ  
の横に店長が立っていた。

「今日のお客さん、明日も予約してたよ」

「そうですか！」

嬉しい。社交辞令じゃなかった。明日も会える。それに恥ずかしい格好のまま控え室でみんなが呼ばれていくのを見ているだけという羞恥に耐えなくて済む。

「生活費の分もちゃんと稼げよ」

「……はい」

雅の場合、本当はここで働くよりも外に出て清掃の仕事でもした方がよほど安定した収入にはなるだろう。けれどそれは、雇ってもらえれば、の話だ。

「初日と翌日はまだ好奇心だ。ちゃんと客の心を掴んで次に繋げる」

「はい」

「あと四か月、身請けが決まらなければ『臓器』だからな」

「あ……」

はい、とは言えなかった。だって死にたくない。怖い。

でもこれはこのルールだ。十年の間に身請けが決まらなければ臓器を売って、借金とそれまでの生活費を返すことになる。もちろんそれまでに借金を完済できれば別だけれど――。

手が震え、床に倒れたモップが高い音をフロアに響かせた。

「す、すみません」

「可哀想だよなあ……どんなに金があったって病気はそんなの気にしない。大金持ちだって癌になるし、その子どもや孫だって心臓に爆弾を抱えていたりする」

店長は雅に覚悟を決めさせようとしているように見えた。たぶん、秒読みに入っただのだ。いよいよ、雅の臓器提供がリアルなものになってきた。

「――でも、金があれば臓器を交換できる」

「交換……」

「日本じゃお行儀よくしてたって順番なんて回ってこないんだよ。金積んで臓器を買う方がよほど早い」

「そうなんですか……」

「知ってるか？ 日本で一年間にどれくらいの間が移植を受けられるか」

「いえ……」

移植したい人の半分くらいだろうか。それでもまだまだ足りていないと思うけれど。

「希望している人の、たった二、三パーセントだよ。百人に二人程度しか受けられない」

「え……」

驚きの数字だった。だってみんな、生きるために移植を希望しているのに。

「心臓や脾臓なら三年、腎臓なら十五年近く待たなきゃならない」

「そんなに……」

だってそれでは……間に合わない人も出てくるだろう。

「あくまで平均だけだな。でもそんなだから、猶予がない人は買っても欲しいと思う。その気持ちはわかるだろ」

言葉が出なかった。だってそんなに少ないとは思っていなかったのだ。

いや、でもだからこそ借金を帳消しにすることができるのか。

「今日もオーナーに相談が来てたらしいぞ。どうやらかわいい孫娘の心臓がヤバいらしい。今日の客を逃したら四か月経つ前に契約結ばれちまうかもしれないぞ」

「ひっ……」

臓器を必要としている人がたくさんいるとわかってても、自分の臓器を差し出すと思いと怖かった。

「人間は不公平だよ。生まれた国、文化、家庭で人生がガラリと変わっちゃう。お前だって違う親のもとに生まれていれば今頃学校に行って友達と笑ってたかもしれないのにな」

高卒——プロフィールに書かれたそれは真っ赤なウソだった。でも小学校もろくに行っていないとわかれば、客は事情持ちだと察して敬遠する。

(僕だって……行ってみたかった……)

両親はギャンブルが好きだった。仕事もせずにのめり込んで借金を作り、ヤクザの取り立てが来るようになったら雅を置いて消えた。それから気付けばここにおいて、毎日の炊事洗濯掃除雑用——しかし十八歳になって店に出るようになってからも指名はつかず……結局以前と変わらない生活を送っていた。

雅が反応を返さないことが退屈だったのか、店長はくるりと背を向け出て行った。

(……臓器)

今日、稲垣に会うまではほとんど諦めていた。人見知りでうまく話すこともできないし、みんなみたいに学校に行っていたわけでもないから世の中の話とか、政治の話とかもまったくわからない。

だから間違えて自分を指名してしまった人には他の子の方がいいですよと、少しでも後悔させないように、お金を無駄にさせないように早い段階でペニスがダメなことを伝えていた。

でも今日……人に優しくされる心地よさを知ってしまった。臓器になるまで残り四か月——稲垣はいつまで来てくれるだろう。臓器になることが決まったら、さよならの挨拶で少しは悲しんでくれるだろうか。

(そこまでは……通い続けてもらえないかな……無理だよね……)

涙がポロリと落ち、テーブルを濡らした。手にしていたおしぼりで拭くと、水っぽい涙のかわりにねっとりとした精液がついてしまう。

(こんなふうにかくさん射精できたら……そうしたら……)

おしぼりを折り畳み、面を変えてテーブルを拭う。

(おちんちんが……ちゃんと気持ちよかったら……)

しかし拭いても拭いても、またポタポタと水滴がテーブルを濡らしていく。  
「僕……もうすぐ死んじゃうの……？」  
咳きはフロアに吸い込まれるようにして消えた。

翌日——。

「こんにちは」

「稲垣さん……！」

本当に来てくれた。

雅はほっと胸を撫で下ろした。しかしそれを気取られぬよう笑顔を作る。

「今日も会えて嬉しいです」

「私もだよ。腕の中に雅くんがいないとなんだか落ち着かなくてね」

「僕も早くぎゅってしてほしいです」

早く腕の中で安心したい。そして今日も自分は生きていられたと実感したい。

「おいで」

稲垣の腰を跨ぐようにして膝の上に座り、ぎゅっと抱きついて首の匂いをすんすんと嗅ぐ。

「いい匂い……好き」

（よかった……僕は今日も生きてる……）

「おっさん臭いと思うんだけどね」

「そんなことないです。ドキドキしますし、安心します」

本音なのに、自分の言葉を遠くで聞いているような気分だった。頭の中に「臓器」がこびりついて離れない。

「嬉しいよ。一緒にいない間、おちんちんは大丈夫だった？」

「お風呂でちよつとつらかったけど、稲垣さんのことを考えてたら大丈夫でした」

「私のこと？」

「痛いけど、稲垣さんに触ってもらうためにきれいにしなくっちゃって」

「……本当はここにシャワーがあつたらいいんだけど」

「え？」

「そしたら雅くんになんかそんなつらいことはさせずに私がしてあげられるのになって」

「そんな……」

稲垣は本当に甘やかすのがうまい。けれど優しくされるとつい調子に乗ってしま  
いそうで……そうなったときに、嫌われて捨てられてしまうのではないかと怖くな  
る。

（稲垣さんが来てくれなくなったら臓器だ……）

どうにか稲垣を繋ぎとめておかなくては。でもそう思う一方で、稲垣一人来てく

れたところで身請けをしてもらえない限り、四か月後の「臓器」が免れないこともわかっていた。

「稲垣さんのためにおちんちん洗うの、幸せでした」

そんなことを考えていたせいも、まるで別れの言葉のようになってしまった。しかしそのことに稲垣は気付かずにくれた。

「そうか……じゃあ私のためにきれいにしてくれたおちんちんを見せて」

「あ……」

「ん？」

「あ、いえ……見てください」

喜びと安堵はもう空っぽになっていた。今あるのは、失敗してしまったらどうしようという恐怖心だけ。

稲垣の体から下り、テーブルに座る。ゆっくりと足を開くと、稲垣の視線がスカートの中注がれるのがわかった。その隙に目を閉じて深く息を吐く。

(大丈夫……大丈夫)

覚悟を決め、声が震えないように意識する。

「おちんちん、たくさん見てください」

今日の下着は紐パンで、ペニスを包む筒状の布がついているだけのもの。陰囊は隠されずに二つのタマの真ん中を紐がキュッと通っている。とてもセクシー。けれど稲垣はクスクスと笑った。

「まるで大人のランジェリーをつけた子どもだね」

そう言われるだろうことはわかっていた。だってこれはオーダーメイドではないから、雅のペニスでは筒のほとんどが余ってしまうのだ。

「とってもかわいいよ。タマもぷりぷりだね」

稲垣の手が掬うようにしてそれを持った。中身を確かめるように優しく揉まれる。

「あっ……」

「おちんちんには触らないから大丈夫」

「はい……」

「おちんちん起ってるね。でもまるで釣竿みたいに余った下着が垂れちゃってるよ」  
「恥ずかしい……」

きつとナンバーワンだったら勃起すると苦しくなってしまうって、早く脱がせてといやらしいおねだりをするのだろう。

「お尻はどうなってるの？」

「ん……見てください」

床に下りて稲垣に背を向け、テーブルに上体を預ける。お尻を突き出すようにすると、稲垣が感嘆の声を上げた。

「ほお……」

お尻の肉に手が添えられた。左右に割り開かれると紐しかない下着はアナルを簡

単に見せてしまう。

「つけたままセックスができる下着だね」

「あ……」

「アナルもピンク色だなんて」

「ピンク……？」

「そうか、自分では見られないからね。雅くんのお尻の穴はとてもきれいなピンク色だよ。おっぱいよりも少し濃いかな」

「やつ、恥ずかしいっ！」

知る必要のないことだけれど、稲垣に教えてもらえたことは嬉しいと思う。

「この下着は汚したら怒られるのかな」

「大丈夫です」

「じゃあ、せっかく先っぽも余ってるし、そこに精子を出してみようか」

「え……」

「お尻とタマタマで射精できるかな」

「ひああああっ！」

ヌルヌルの舌がアナルを舐めた。しかし一番大事な中心部は紐が邪魔をして、その感触を楽しませてくれない。

「あっ、あっ」

稲垣も紐をどかしてくれたらいいのに、なぜか穴の部分に紐があてがわれた状態のままレロレロとそこを舐めた。

「あっああっ！」

（お尻の穴が汚いから……？）

だから肝心などころには舌が触れないようにしているのだろうか。

「あっ、あんっ、あっ」

キヤストはみんな出勤前に必ず洗浄をして、一人一人ボーイに中の状態を確認してもらっている。きつと稲垣はそれを知らないから——でもそれを言えば舐めてほしいとねだっているように聞こえてしまうだろう。もし稲垣がそこを舐めたくないと思っていたら、嫌なことをねだられると警戒して指名してくれなくなってしまったかもしれない。

そしたら——。

「……雅くん？」

「え？」

「気持ちよくなかったかな。お尻を舐められるのは嫌だった？」

「あっ……」

いやらしく喘ぐのを忘れていた。普段から演技をしていたわけではないけれど、完全に気が抜けてしまっていた。

「ごめんなさい、気持ちよすぎて大きな声が出ちゃいそうで」

稲垣から見えない角度で手の甲を慌てて噛んで齒形をつけ、さりげなくそれを見せる。

「ああ、そんなことはしてはいけないよ。傷がついてしまう」

稲垣が眉尻を下げたのを見て罪悪感に襲われた。けれどどうしても……稲垣に指名してもらえなくなったら自分は明日にでも死ぬのかもしれない、という現実を忘れることができない。

「ごめんなさい……でもお尻を舐められてえつちな声が出ちゃうなんて恥ずかしくて」

「いいんだよ。えつちにさせたくてしてるんだから」

「稲垣さん……」

稲垣自身は少しも気持ちよくなるうとしないのに。

「おちんちん、下着にこすれて痛いかな」

「大丈夫です。下着に精子……出したいです」

稲垣の優しさに、暗くなりかけていた気持ちが少しだけ浮上した。本当は事情を話してどうか身請けしてくれないかと縋ってしまいたかったけれど、そんなこと、できるはずがない。まだ会って二日目だし、自分が臓器にならなかつたら必死に生きようとしている命はどうなってしまうのだろうと考えてしまう。

「じゃあお尻の穴を舐めるよ」

「えっ……ああっ！」

紐がどかさされ、穴に舌を差し込むようにしてくりくりと舐められた。それがさつきまでとは比べ物にならないほど気持ちよくて。

「アアッ！ あっ、あんっ！」

「えつちになつてきたね」

「あっ、だめえっ、」

一緒に陰囊を揉まれ、萎え気味だったペニスがむくむくと起ち上がっていく。

~~~~~

なぜか老爺は気まずそうな顔で雅から視線を逸らした。

「あの……？」

「いや、なんでもないよ。買うのはこれだけかな」

「えっと」

どうしよう。クッキーやおせんべいも買った方がいいだろうか。でもこの人を待たせるのは申し訳ないし……明日も時間はある。

「これだけで大丈夫です。じゃあ飲み物を買ってきます」

「え？」

「飲み物を飲みながらお話しするんですよ」

「ああ、いや、それはお店に入るから」

「あ……そうですか。すみません、じゃあレジに行ってください」

「一緒に行くよ」

あまり時間がないのだろうか。少しソワソワしているように見えた。

「あの……お店ってどこに行くんですか」

「近くの喫茶店だよ。とってもおいしいケーキがある」

「ケーキ？」

「どんなケーキが好きかな？」

「僕、誕生日じゃないですけど……？ あ、もしかしておじいさんが誕生——あつ、

ごめんなさい」

「誕生日？ ……ああ、いや、誕生日じゃなくてもケーキを食べていいんだよ」

「あの、それよりおじいさんなんてごめんなさい」

「かまわないよ。わたしには孫がいるからね」

「お孫さんがいるんですか」

「ああ」

「へえ……」

孫という言葉聞いて戸惑った。孫娘、心臓……どうしても「臓器」が浮かんでしまう。

幸いレジが空いていて、老爺も話を続けようとしなかったので話はそのまま流れることになった。おつりと六つの飴を大切にポシエットにしまう。

出入り口に向かうと、暗かった空は真っ黒になっていた。

「あ……雨」

「わしが来たときから降っていたよ」

「僕が来たときは降ってませんでした……傘持ってきてないや」

「車だから大丈夫。帰りは送ってあげるよ」

「でも——」

「いいから。さあ」

断るのも申し訳ない気がして、老爺がさした真っ黒くて大きな傘に二人が入った。雨音も大きくて、なんだか少し怖いくらいの天気。

「さあこれだ」

案内されたのは駐車場の端にとめられていた、黒くて大きな車だった。店のボーイがキャストの送迎に使っているようなやつ。あまり高齢の人が運転するようなイメージではなかったので少し驚く。

ガラリと開けられた後部座席。礼を言って乗り込むと、突然後ろから口を塞がれた。わけがわからず、頭が真っ白になる。

「んむっ！」

「暴れるな」

知らない男の人の声だった。怖い。
助けを求めるように隣に乗り込んだ老爺に視線を向けるが、気まずそうに逸らされてしまった。

「すまない……本当にすまない……」

謝りながら、老爺が雅の手足をチューブのようなもので縛った。手首と足首をそれぞれべたりとくつつけられてしまったので、抜くことができない。

(うそ……)

どうして、なんで——しかし、老爺の「すまない」という言葉。思い当たることがあったので、もうそれほど驚きはしなかった。

「騒ぐなよ」

一瞬口から手が外された。その隙に老爺に問う。

「あの……心臓が欲しいんですか」

しかし老爺は強く握りしめた自分の拳を見つめて「すまない」と一言呟くだけで、雅も手ぬぐいのようなもので口を塞がれ、さらにその上から黒い頭巾のようなものを被せられてしまったので、それ以上話すことはできなくなった。

~~~~~

「稲垣様」

「なんだ」

「雅の身請けの件ですが」

「引渡しは明日なのはわかっている」

「そうではなくて……半身麻痺の子を——」

その言葉の先を想像するより先に、拳がテーブルを殴っていた。

「バリアフリーの部屋を探す。苦労はさせない」

稲垣が歩き出せば、宮部はもう何も言わなかった。

病室へ向かいながら橋爪にメールを送る。

『バリアフリーのマンションか一軒家を早急に探し、候補を送ってくれ』

返信はすぐに来た。

『十九時までにはお送りします。それから橋理事長が見舞いに伺いたいようで、ご連絡いただきたいとのことです』

橋の名前を見て、慌てて通話可能スペースに飛び込んだ。

「俺だ。橋理事長からはいつ連絡が」

『十分ほど前です。ですが私からは連絡しないようにと』

「どういうことだ」

『大変なときだろうから、稲垣組長から連絡があったときに伝えるようにと』

「そうか」

懐が深く気遣いのできる人。これだからヤクザに厳しいこのご時世でも橋組に入りたいたいという者は後を絶たない。

「今回の件の礼に行く。あちらの都合でアポを取っておいてくれ」

『そうおっしゃるだろうと思つて確認しておきましたが、病院から離れるんじゃないとお叱りを受けました。組のことは一旦忘れ、そばにいてあげなさいと』

ため息がこぼれた。偉い人間だというのに一切おごることのない、できた人格。

「わかった。お言葉に甘えよう」

『本日中に、本部に橋理事長のお好みのスイーツをお届けします』

「よろしく頼む」

続いて橋に電話をかける。取次に名乗ると、保留にされることなくすぐに電話を回された。

「お疲れ様です。今回の件では色々ご迷惑を——」

『様子はどうぞ』

その言葉から、状況はすべて把握していると推測する。

「半身麻痺が残るそうです」

『右……左か？』

「下半身です」

『……そうか。手放す気はないんだろう』

「はい」

『困ったことがあったら連絡しなさい』

~~~~~

「あああつ！ あつ、あつ！」

「かわいい……おちんちんで気持ちよくなれるようになってよかったね」

「はいっ、あつ！」

その代わり、歩くこともできなくなったけれど——。

「男の子のだからね。おちんちんで気持ちよくなれると人生が変わるよ」

「ああつ！ ああ、ああつ！」

返事をしたいのにもういきそうだった。苦しい。もう射精したい。でも気持ちいい射精が初めてで、どうしたらいいかわからない。

「……聞こえてないね、おちんちんでたくさん気持ちよくなって、かわいいね」

「あああつ！」

敏感な先端を握られ、こみ上げてくるものが弾けるように射精した。でもまだ足りない。もつともつと抜いてほしい。

「おちんちんで気持ちよくイけたね。おめでとう」

「はあつ……稲垣さん……」

「うん？」

「もつと……もつとおちんちんで気持ちよくなりたいつ」

こんな気持ちいいのでは、イってもイっても満足することなんてないのでは、
と思った。それでようやく、どうしてペニスを弄らせる店が成り立っていたのか理
解ができた。

（ナンバーワンの人も、こんなに気持ちいいのをたくさんしてたんだ……）

大変だったテーブルの掃除。どうしてこんなにたくさんの精液があるのだろうかと思
っていたけれど、これほどあとを引く快感なら納得だった。

「うん、たくさん気持ちよくなるうね」

「ひああっ！」

嬉しそうに頷いた稲垣は、今度は手と腰を同時に動かした。アナルを穿たれ、気
持ちはいいペニスは扱かれる。しかも皮越しとはいえカリ首の辺りをこりこりされる
とたまらなかった。イったばかりのペニスは萎えることもなく、また次の射精の準
備を始めてしまう。

「あああっ！ あっ！ いくっ！ またイっちゃうっ！」

「何度でもイっていいんだよ。空っぽになるまで射精してごらん」

「ああっ！ そんなっ、無理っ！ 無理っ！ あああっ！」

無理、と思うのに、空になるまでイってみたいと思った。だって本当に気持ちよ
くて、このままずっと射精し続けていたいと思う。

「ひああああっ！」

少しだけ強くペニスをこすられて、また精液をびゅっぴゅと飛ばした。すごい。
すごく気持ちいい。

「たくさん出てる。若さだね」

「やあ……」

そんなもの見ないでほしい。しかし稲垣は腹を汚す白濁をうっとり見つめ、指
先で掬い取った。

「とろとろだ」

「やっ！ 汚いですっ！」

「汚くなんてないよ。大切な雅くんの精子だ」

「や……あ、あの、稲垣さんもイってください……」

恥ずかしいおねだりだ。でも二回もイけばさすがに気持ちは落ち着いた。今度は
稲垣の番、と考える余裕ができた。

「ああ。そうだね。雅くんのアナルでイかせてもらおうよ」

「あ……」

嬉しい。こんな体でも稲垣が快感を得てくれる。

「つらかったら言うんだよ」

「はい——あああっ！」

優しく穏やかな稲垣の、激しい動き。イメージとまったく違う雄々しい律動に胸が高鳴り、甘えてくっつきたくなってしまう。「ああっ！ 稲垣さんっ！ いながっ、あっ！」

約9万8千字です。

よろしく願います。

求める理由 ——サンプル——

gooneone (ジーわんわん)

2021/12/30

メール:gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter:@gooneone11

LINE:gooneone

